マルクスの弁証法的方法

エンゲルスは、マルクスの弁証法を攻撃しているデューリングを反論して、こう言っている。――マルクスは、ヘーゲルの三段階法によってなんでもかでも「証明」しようなどとは、かつて考えたことはなかった。マルクスは現実の過程を研究し考究したにすぎないのであって、彼は、現実にたいする理論の合致をもって理論の唯一の基準とみとめたのである。また、もしこのばあいに、なんらかの社会現象の発展がしばしばヘーゲルの図式、すなわち、措定――否定――否定の否定という図式にあてはまるとしても、そこにはなんのふしぎもない。なぜなら、自然においては、これはけっしてまれなことではないからである、と。そして、エンゲルスは、すすんで、自然史（穀粒の発展）および社会の分野――はじめに原始共産制があり、つぎに私的所有かあり、そのあとに労働の資本主義的社会化がある、あるいは、はじめに素朴唯物論かあり、つぎに観念論があり、そして、最後に科学的唯物論かある、等々、というような――から実例をとってくる。エンゲルスの論証の重点が、唯物論者の任務は現実の歴史過程を正しく、かつ精密にえがきだすことであって、弁証法を固執したり、三段階法の正しさを証明するような実例をえりだしたりすることは、科学的社会主義が成長してきた母胎であるヘーゲル主義の残存物、ヘーゲル主義の表現様式の残存物にほかならない、ということにおかれているのは、だれにも明らかである。実際に、三段階法によってなにものかを「証明しよう」とすることはばかげていること、また、だれもそういうことは考えもしなかったということが、ひとたび断定的に宣言されている以上は、「弁証法的」過程の実例はいったいどんな意義をもちうるだろうか？それが学説の起源を指示したものであって、それ以上のものでばないことは、明白ではないか？……

マルクスとエンゲルスが――形而上学的方法に対置して――弁証法的方法と名づけたものは、社会学における科学的方法にほかならないのであって、その方法とは、社会を、不断の発展のうちにある生きた有機体として（なにか機械的に連結され、したがって、個々の社会的要素のあらゆる恣意的な組合せを容認するものとしてではなく）観察することにあり、この生きた有機体を研究するには、当該の社会構成体を形成する生産関係を客観的に分析し、この社会構成体の機能と発展との諸法則を考究しなければならないのである。形而上学的方法（社会学における主観的方法も、疑いもなく、この概念のうちにふくまれる）にたいする弁証法的方法の関係については、われわれはあとで、ミハイロフスキー氏自身の議論の実例で例証するように、つとめるであろう。ここでは、ただつぎのことを注意しておこう。すなわち、エンゲルス（デューリングにたいする論戦、ロシア語では『空想から科学への社会主義の発展』）なり、マルクス（『資本論』のなかのいろいろの評註や第二版への『あとがぎ』、『哲学の貧困』）なりのあたえた弁証法的方法の規定や記述を読んだものはだれでも、ヘーゲルの三段階法は問題にもされていないこと、そして、全問題は、社会の進化を、経済的社会構成体の発展の自然史的過程としで観察することに帰着することを、知るであろう、ということである。この証明として私は『ヴェーストニク・エヴローブィ』の１８７２年第５号のなかでなされている弁証法的方法の記述（『カール・マルクスの経済学批判の見地』という論評〈ペテルブルグ大学教授イ・イ・カウフマン

の執筆になるもので、マルクスはこの論評を弁証法的方法の最良の叙述の一つとして評価している。〉）を in　extenso〔全文〕引用しよう。マルクスは、この記述を『資本論』第二版への「あとがき」に引用している。マルクスはこのあとがきのなかで、彼が『資本論』でもちいた方法はよく理解されなかった、と言っている。「ドイツの書評家たちは、もちろん、ヘーゲル流の詭弁論だと言ってわめきたてた。」　〔『資本論」第一巻、１５ページ〕そこで、マルクスは、自分の方法をより明確に説明するために、前記の論評のなかにあるこの方法の記述を引用しているのである。すなわち、そこではつぎのように述べられている。

「マルクスにとって重要なのは、ただ一つ、彼がその研究にたずさわっている諸現象の法則を発見することである。……さらに、彼にとってなによりも重要なのは、諸現象の変化、それの発展の法則、すなわち、一つの形態から他の形態への、関連の一つの制度から他の制度への移行の法則である。……したがって、マルクスがつとめるのは、ただ一つ、社会関係の一定の制度の必然性を精密な科学的研究によって立証し、そして、彼にとって出発点ならびに支点として役だっている諸事実を、できるだけ非の打ちどころのないように確認することである。この目的のためには、彼にとっては、現在の制度の必然性と同時に、この制度から不可避的に移行していかねばならない、いま一つの制度の必然性を立証すれば、それでまったく十分であって、人間がこれを信じるか信じないか、意識しているか意識していないかには、まったくかかわらないのである。マルクスは、社会の運動を、人間の意志や意識や意図に依存しないばかりか、むしろ逆に、人間の意志や意識や意図を規定する諸法則にしたがう、一つの自然史的な過程として観察する。」（人間はみずから意識的な［目的」を立て、一定の理想によってみちびかれる、という、まさにその理由で、社会の進化を自然史的進化から区別している主観主義者諸氏のご応対までに。）「……もし意識的な要素が文化史においてこうも従属的な役割を演じるものとすれば、この文化そのものを対象とする批判が、他のなにものにもまして、意識のなんらかの形態、もしくは、なんらかの結果を基礎とすることのできないことは、おのずから明らかである。すなわち、批判の出発点として役だつことのできるのは、理念ではなくて、ただ外的な『客観的な』現象だけである。批判は、ある事実を、理念とではなく、他の事実と比較し対照することに、限定されるであろう。批判にとっては、ただ、双方の事実をできるだけ精密に研究すること、また、それらが現実にたがいに異なる発展契機をなしていることだけが重要なのであって、とりわけ諸制度の系列を、すなわちもろもろの発展段階があらわれてくる継起と連結を、これにおとらず精密に研究することが重要である。つぎのように言う人もあろう。だが経済生活の……諸法則は同一であって、それを現在に適用しようが過去に適用しようが、まったくどうでもよいことだ、と。これこそはマルクスの否定するところである。……その反対に、どの歴史的時期にも、それ自身の固有の法則がある。……経済生活がわれわれにしめすところのものは、生物学の他の諸分野における発展史に類似した現象である。……旧来の経済学者たちが、経済法則を物理学や化学の法則に比較したのは、この経済法則の本性を誤解したものであった。……諸現象をもっと深く分析した結果は、もろもろの社会的有機体が、植物体や動物体と同じように、相互に根本的に相違していることが証明された。……マルクスは、資本主義的経済制度をこの見地から研究し説明することを、自分の目標として設定することによって、すべて経済生活の精密な研究が、かならず持た

なければならない目標を、厳密に科学的に定式化しているにすぎない。……このような考究の科学的価値は、一定の社会的有機体の発生、存立、発展、死滅、ならびに他の、より高度の社会的有機体との交替を規制する特殊的な」（歴史的）［法則を解明することにある。」〔『資本論』第一巻、15~17 ページ］

これが、『資本論』にかんする新聞雑誌上の数かぎりない論評のなかからマルクスがひろいあげて、ドイツ語に翻訳した弁証法的方法の記述であって、彼がそうしたのも、右の方法のこの特徴づけが、彼自身言っているとおり、まったく正確だからである。……

マルクスは、この記述のすぐあとで、彼の方法がヘーゲルの方法と「正反対のもの」であると、はっきり述べている。ヘーゲルによれば、「理念の発展は、三段階法の弁証法的法則にしたがって、現実の発展を規定する」。いうまでもなく、このようなばあいにだけ、三段階法の重要性や弁証法的過程の不可論駁性をうんぬんすることができる。だが、マルクスは言っている。私にとっては、これに反して、観念的なものは物質的なものの反映にすぎない」〔マルクスの原文では観念的なものは、「人間の頭脳のなかでおきかえられ、言いかえられた物質的なものにほかならない」〕と。このようにして、全問題は、「現存するもの」および、それの必然的発展の［肯定的理解」に帰着する。

第一巻「人民の友」とはなにか P160~164

コメント

なんらかの社会現象の発展がしばしばヘーゲルの図式にあてはまるとしても、マルクスの弁証法はヘーゲルの逆立ちした三段階法の使い方とは正反対のものである。マルクスは、ヘーゲルの三段階法によってなんでもかでも「証明」しようなどとは考えなかった。

マルクスとエンゲルスが、形而上学的方法に対置して、弁証法的方法と名づけたものは、社会学における科学的方法であって、社会を、不断の発展のうちにある生きた有機体として観察、研究することであり、当該の社会構成体（資本主義社会）を形成する生産関係を客観的に分析し、この社会構成体の機能と発展との諸法則を考究することであり、マルクスは現実の過程を研究し考究し、現実にたいする理論の合致をもって理論の唯一の基準とみとめたのである。